



Title	「東西蝦夷山川地理取調図」における地名分布について
Author(s)	小林, 和夫
Citation	北海道大学人文科学論集, 11, 125-147
Issue Date	1974-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34310
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_PR125-147.pdf



「東西蝦夷山川地理取調図」 における地名分布について

小林 和 夫

一、はじめに

北海道に居住する者にとっては、意識の有無にかかわらず、先住者であるアイヌ人達との深い関係を持たざるを得なかった。その典型ともいべきものが、北海道の地名であろう。

北海道の地名は、たとえば北海道の市町村名の半数以上が、アイヌ人達から受けついだ、いわゆるアイヌ語地名とはつきりわかっているものである。この市町村名の他に、山岳に河川に多くのアイヌ語地名が残されていて、現に我々はそれらを使用しているのである。

北海道の地名は難しいという声がある。それは地名を正しく読むことも、また地名からその意味や背景をさぐることも、共に難しいということであろうか。難しいといわれる北海道の地名の多くは、日本語と全く異なっているアイヌ語に、漢字或は片仮名をあてたものである。北海道に生まれ育った者も、時としては、正しく読むことのできない地名もある。ましてや、その意味や背景を理解することとは殆んどできない。アイヌ語を理解していない者にとっては、日

常使いなれた地名でさえも、その意味や背景をうかがうことができないものである。

アイヌ語地名は、これまでに多くの人によって研究され、その正しい形、意味、背景を理解しようとする努力が続けられて来た。しかし、現状ではまだ不十分であり、たとえば、『札幌』という比較的名著な市名でさえも、どの場処に命名されたものであるのか、正しい形はどうであったかということについては、今でも幾つかの説がある程である。現在では、アイヌ語だけで会話のできる人は、いわゆる「アイヌ」と自分で考えている人のうちからさえ、さがすことは難しくなっている⁽¹⁾。その上に、研究対象であるアイヌ語地名は、曾ての北海道には、どの土地でも「細かく調べてみると、溝のような小川にまでも、びっしりとアイヌ語の名前がついていた⁽²⁾」ということであるが、「びっしり」ついていた筈のアイヌ語地名も、地名研究家に必携であるべき市販の地図からは、この言葉とは程遠い減少ぶりである。第一に、北海道にどれ程のアイヌ語地名があったのか——先人の残した文献や地図に、アイヌ語地名の総てが記入されていると考えることはできないにしても——それを知る手掛りとしては、今では、先人の残した文献や地図を利用する以外に方法が全くなくなってしまうのである。

正確な地形や場所を教えてくれる「国土地理院・五万分の一地形図」は、確かに多数のアイヌ語地名を残しているが、それでも「東西蝦夷山川地理取調図」や「北海道庁測量・五万分の一地形図」にくらべると、その減少ぶりはまことに著しいものがあり、地名数だ

けに限定してみても、アイヌ語地名の研究には不十分なものになってしまっている。

さて、このような地図の内容の変化は、夫々の社会を反映した結果なのであろう。私は地図の持つ盛沢山の内容から、地名の分布に着目してみた。地名はどのように分布しているのだろうか。またその分布はどのように社会の影響をうけているのだろうか。このような考えのもとに「東西蝦夷山川地理取調図」、「北海道庁測量・五万分の一地形図」そして「国土地理院・五万分の一地形図」の地名分布、その他について調査を行なった。

地名の分布は「東西蝦夷山川地理取調図」と「北海道庁測量・五万分の一地形図」が極めて類似した分布をみせるのであるが、「国土地理院・五万分の一地形図」は、前二図とはいささか相異した分布をみせているのである。私は前二図の地名分布に、アイヌ社会の面影を見ているのであるが、それはこの二図には、日本人の進出定住が一部に限られ、日本語地名の出現が極めて少ないということが、単純であるかも知れないがその大きな理由なのである。

地名には、その地で生まれ死んでいった者の生命が吹きこまれていて、その地名の分布にも、必ずやそうした人々のつくった社会が、文化が反映しているものである。

(私はこの小論で、前記三図のうち「東西蝦夷山川地理取調図」について述べ、他の二図については、もしあれば別の機会に述べることにする。以下「本図」というのは「東西蝦夷山川地理取調図」

のことである。)

一、「東西蝦夷山川地理取調図」について

「本図」は、知る人ぞ知る著名なものであり、蛇足と思われるが、作製時の状況と評価を、簡単に紹介しておくことにする。

北海道の地図は『文政九年(一八二六)伊能忠敬、間宮林蔵等の測量をもととして、幕府天文方高橋景保が作製した「大日本沿海実測図」中の蝦夷全図によって海岸線はほぼ正確に描き出され、安政六年(一八五九)松浦武四郎によって外画の中に山脈、河川、湖沼等が記入され、一応完成された』⁽³⁾ものであるが、この松浦武四郎によって作製されたものが「本図」である。「本図」を作製する際の苦勞は、松浦武四郎自身の言によれば「狐屈熊洞ニ宿スヲ辛トセス草根樹皮獸骨魚肉ニ生命ヲ安シ穀食ヲ絶「是ヲ苦トセス沙場ニ臥スヲ男兒ノ幸トシ四年ヲシテ此図漸ク稿ヲナス」⁽⁴⁾とあるが、おそらくは少しの誇張もなかったことであろう。「本図」が作製されるまでの当時の地図は『梓ニ鏤スルモノ十ヲ以テ算スル然イヘトモ水派山脈ヲ審ニセシ物ヲ見ス』⁽⁵⁾ということであった。「本図」は、前時代とは比較にならぬ程に正確さをました精図で、明治の中期以降、北海道庁によって測量作製された「二十万分の一地形図」が刊行されるまでの間、内陸部を知るための唯一のものといつてよく、当時としては、まさに画期的な地図であった。

「本図」は美濃紙一枚に経緯各一度を描いたもので、計二六枚か

らなっている。そして『其緯タルヤ伊能某ノ経緯度実測併高橋某ノ地勢提要ニ原キ経度ハ近藤某ノ量地説』⁽⁶⁾によったという。当時としては、画期的な精図であったが、そのために、かえって後年には幾つかの手厳しい批判を加えられることにもなった。その一つは「本図」の不正確さについてである。松浦武四郎の「本図」作製のための調査は、前人未踏の地に及んではいても、その方法は精々磁石で方向をさぐるだけで、あとは野帳と矢立とを懐中になされたもので、そのため、図上の位置は絶対的にも相対的にも不正確であることを免れなかった。たとえば、開拓使技師で、米国の地質学者B・S・ライマンは、明治七年（一八七四）の七月、石狩川上流より十勝川支流の音更川へと山越をしたが、彼は「本図」をたよりにし、かえって旅程に誤算を生じた。そして「松浦図ノ錯誤モ亦甚ダシ」⁽⁷⁾と彼は述べている。また松本十郎は「石狩十勝両河紀行」に「本図」の誤謬を再三再四指摘している。その一例をあげると「松浦氏ノ紀行ハ全ク土人ヨリ聞書タルコト判然、又絵図亦頗ル齟齬セリ。嗚乎都人士能ク人ヲ欺ク。第一石狩、十勝両水源ノ位置天ニ誤ル」⁽⁸⁾とある。しかし当時の事情を考慮に入れば、その不正確さを指摘するよりは、むしろ松浦武四郎の超人的努力とその業績を賞讃すべきものであろう。

さて「本図」に書きこまれた地名についても、精度についてと同様に批判がみられる。永田方正は「北海道蝦夷語地名解」で「地名ヲ記スル最モ多クシテ誤謬最モ多キ者ハ松浦武四郎氏ノ地図ナリトス——中略——然レトモ同氏ノ地図ニ古名ヲ存スル所アリ——中略

——本篇初メニ同氏ノ誤謬ヲ正シタレドモ煩ニ堪ヘズ印刷ニ臨ミ多クハ抹殺セリ」⁽⁹⁾と述べている。まことに手厳しい批判である。しかし、「誤謬」が多いにせよ、地名そのものの存在を知らせてくれることに変わりはなく、永田方正のいうように「地名ヲ記スル最モ多」い貴重な図なのである。「本図」の縮尺はおおよそ二二或いは三三万分之一である。それ故に砂浜の地名の少ないところは「一ヲ残サス」⁽¹⁰⁾であったが、地名の多いところは「記シ尽シ難キカ故漏ル、モノ多シ」⁽¹¹⁾であった。「北海道庁測量・五万分之一地形図」と「国土地理院・五万分之一地形図」の地名数は約一一、七〇〇である。「本図」の場合は約九、七〇〇である。地名数の点からいっても、これら三図における人員、期間、費用等の調査規模を考えると、松浦武四郎個人の努力の結晶ともいふべき「本図」が、種々の批判から受ける印象以上に、入念なものであったことがわかるのである。松浦武四郎の膨大な日誌類からも知ることができるのであるが、彼は見聞したものを一つも残さず書きこむ丹念さをもっていた。このことを知る者は、「本図」の凡例を読みながらも、あえて「この地図は聞くところの蝦夷地名は一も省略せず」⁽¹²⁾といったくなる程のものであった。「本図」は北海道の全てを覆い、またかなりの精度をもっているものとして、北海道の地名を調査するには、一度は手にしなければならぬものになっている。

三、「東西蝦夷山川地理取調図」

の地名分布図作製について

「本図」の経緯度を各五分に区画し、その単位区画内の地名を数えあげて、図―(1)の地名分布図を作製したが、「北海道庁測量・五万分の一地形図」と「国土地理院・五万分の一地形図」においても同様の方法で地名分布図を作製した。この方法での単位区画は、第一に北海道北部と南部では面積上で相違のである欠点があるが、地図上の地名の記入は、地名の指し示す面積の中央に書きこまれている訳ではなく、時には大地名、小地名といったものが、単純ならざる形で書きこまれている場合もあり、また三図の精度が夫々に相違しているということ等々、その他の理由もあるが、就中、北海道を同一面積で細分することの困難さを考えると、安易な方法との批判を予想しながらも、経緯度を各五分で区画するという方法をとらざるを得なかった。この方法ならば、五万分の一地形図を、六等分するという簡単な作業ですませることができるのである。しかし、経緯度を各五分に区画することが、適当な大きさであるのかという問題もでてくるが、各種の区画を試用してみたが、結局は全北海道の展望という点から、五万分の一地形図を六等分することになるこの五分区画におちついたのである。

地名の算出は、隣接図との重複をさけ、重複している地名は適当に一方を除外した。川名も、川口部或いは中流部に重複しているも

のは、川口部或いはそれに近いものを優先させて算出することにした。

「本図」では、一区画内の地名数は、0から最高三十までで、一区画内の地名数平均は六・六である。図―(1)では、0、一、六、七、十一、十二、十七、十八、三十の五段階にわけてみたが、これは統計的意図を含まず、ただ便宜的な分類である。一応は一区画内の地名数別に度数分布図を作成し、その図にみられる幾つかのプロックを分類したのである。その結果は、全区画数に対する割合は、地名数0の区画は六%、一、六の区画は五三%、七、十一の区画は二四%、十二、十七の区画は十二%、十八、三十の区画は五%となり、0の区画を除けば、各段階毎にほぼ半減していつている。

この各段階を

0		0 級
一		I 級
七		II 級
十二		III 級
十八		IV 級

とする。I 級は、一区画内の地名数は平均以下であり、II 級以上は平均以上ということになる。

四

地名は、その土地に生活した人々の生活記録であるから、その社

会独特の地名命名法とでもいうべきものが見出される。アイヌ語地名には、トマムノシケクシベツ（荒野の中央を通る川）、フレベツ（赤い川）、チライウシナイ（イトウ多い川）、オニウシベツ（川尻に樹が多くある川）、エエンイワ（頭のとがっている山）といった類のものが多くあり、日本の地名とはいささか趣を異にしている。

永田方正は「北海道蝦夷語地名解」で「其命名スルヤ必ず土地ノ実形ニ於テシ敢テ苟モ虚名ヲ附スル者鮮シ」といい、土地に対するのと同様に、生物に対しても「其物アレバ必ず其ノ地名アリ故ニ一度地名ヲ聞ケバ容易ニ地理ヲ知り特産ヲ探ルヲ得ベシ亦簡ニシテ便ナラズヤ」といつている。柳田国男は、永田方正の此の書を手にして『アイヌの地名の附け方は単純にして要領を得ている』『彼等の名の附け方は一色しか無かった。一言でいへば天然描写法、即ち子供たちが今でも名を知らぬ土地を現さうとするのに使ふもの、是ただ一色で用を辨じたのだ』といつている。永田・柳田両氏のいうごとく、彼らの日常活動の観察と対象が、生の形で素朴な地名になっている。吾々はアイヌ語地名の調査によって、アイヌ社会の活動や興味の対象を知ることができ、当時の自然をしのぶことができるのである。またその地名の分布によって、彼らの活動範囲も自ら知ることができるのである。

現在の北海道の地名は「国土地理院・五万分の一地形図」によって、おおよそは知ることができるが、先にもあげたように、その地名数は一一、七〇〇程である。このうちアイヌ語地名と考えられるものは四、五〇〇程であって、四十%にみたないのである。しかも中

にはチカプニというアイヌ語地名が、近文・近文台、またルベシベという地名が、留辺蘂第一・留辺蘂第二……といったように使用されていて、もともと一つの地名であったものが、二つ或いはそれ以上に水増しされた形で使用されている。このような水増しの形で、総地名数の四十%程がアイヌ語地名であるといっている。水増しされたものを、もともと一つのものに縮少整理すれば、総地名数に対するアイヌ語地名の割合は、もう少し小さい数字になる。

「国土地理院・五万分の一地形図」の六十%程の地名は、在来のアイヌ語地名にとつてかわつたものもあろうし、無名の地に新しく命名されたものもあろう。「本図」の地名の大部分がアイヌ語地名であることを思えば、このような「国土地理院・五万分の一地形図」の地名の内容の変化は、当然地名の分布にも変化をもたらした。たとえば「本図」にみられる胆振国の東部と日高国西部にかけての、高い地名密度の地域はすっかり消えさり、かわつて石狩平野、上川盆地そして十勝平野等に高い地名密度地域が現われている。

これら二図の間には地名の内容と分布に、右のような大きな変化が現れているが、それは畢竟、社会の変化に由来するものであろう。「本図」には作製された幕末時のアイヌ社会が、「国土地理院・五万分の一地形図」には、「本図」が作製されてより百年余を経過した日本人の現代社会が投影されている訳である。

こうした考えのもとに、「本図」作製当時の社会、特に「本図」の地名分布に強い影響を与えていると思われるものについて触れてみることにする。

(一) コタン⁽⁸⁾

アイヌ社会のコタンは「蝦夷島記」によれば「蝦夷は一村を一国と申候一村に家五十軒七十軒或二十軒三十軒人数百二百三百程罷在候へば一国と申候⁽⁹⁾」とある。本書の村はアイヌ語でコタンといわれているものであるが、本書によれば、コタンの規模は小は二十軒、大は七十軒となっていて、他書に述べられているものからみれば、かなり大規模のものである。たとえば「蝦夷草紙」には「蝦夷地一村といふとも、家作わづかに五六軒、七八戸又は拾軒もある処を大村としてまれにある也⁽¹⁰⁾」とあって、十軒もあれば大村ということになっている。アイヌの都といわれた日高国の沙流川筋では、「竹四郎廻浦日記」によれば、表一(1)のごとくで、「蝦夷草紙」のいう大村よりも可成大きくなっている。しかしオホーツク海沿岸の北見国では、表一(2)のごとくで、特別のところを除けば、一般には「蝦夷草紙」に述べられている規模のコタンである。「蝦夷島記」のいう規模のものは、超・大村ともいべきもので、このような超・大村は、夫々の地方の漁業、交易の中心であった会所・運上屋元に多く、竹四郎廻浦日記」によれば、フルビラ・五四軒、ヨイチ・七九軒、クツタルウシ（現小樽市）・四三軒、ソウヤ・三九軒、シャリ・三十軒、白ライ・八八軒等その他にみられる。こうした超・大村の場合は、日本人の強い干渉の及んでいることが多く、たとえば今例としてあげた白ライの場合は、『熊坂エカシテバより七代前に初めて松前藩の会

所なるもの白老に設けられたり、之等各所に散在せる小部落は会所の命により現在の位置に移転し、大部落となり今の白老コタンの基礎を作れり⁽¹¹⁾』ということである。日本人にとっては、アイヌ人は最初は単なる交易の相手としての存在でしかなかったが、次第に漁撈の労働を彼らに依存するようになると、労働者として手近のところに、常時住まわせる必要が生じて来たのである。

「本図」が作製された頃は、沿岸の漁業、交易の盛んなところに「蝦夷島記」のいう規模のコタンが点在していて、「蝦夷草紙」のいう規模のコタンは、その間をみたすように存在していたと考えてよいのではなからうか。

ところで、こうしたコタンの永続性は、強制定住させられたものを除けば、本来の姿はどのようなものであったろうか。「蝦夷草紙」は『すべて住所に家宅ありといへども、一生涯の住所とも定めず。稼に出るときは、家族をつれだちともなひ、器材をたづさへ、其の住所をはなれ、我家をば丸あけにして、稼に出で、其先々に獵産ある所に仮小屋をかけ、住居を定める事也。是蝦夷地の風俗なり。獵産は春業をすれば年中同所には住居せず、獵産の多き方へ移りて所々に仮住居し、年月をおくり生涯住居を定ざるなり』⁽¹²⁾といひ、「蝦夷島記」にも「魚鳥獸無之候得者其村を捨て又魚鳥獸の有之所を見たて其所に皆引越居住仕候故所も不定よし⁽¹³⁾』といっている。

彼らの住居は、漁獵の都合で移動して定まらず、常に仮住の性格をもっていたことになる。これを裏打するかのように、鷹部屋福平の「アイヌの住居」には、『生活の基調が漁獵にあったアイヌにあつ

ては、一地点より他地点にその住家を移動せしめる必要がある関係上、アイヌ家屋の主要骨組の細部には、その移住性が認められ民族的特徴を示して居る⁽⁸⁵⁾とある。しかし一方では高倉新一郎によれば、このコタンの移動性を『和人の積極的な干渉の加わる直前の姿』として認めているが、『歴史に現われてくるアイヌの部落はそんな不安定なものではない。すくなくともその継続が許される限り、一定の場所に彼等の生活の本拠が聚落し、四季の獲物を求めて移動する範囲はほぼ一定し、しかも出稼ぎの形で行なわれていて、その期間が終ると、元の場所に帰るようになっていた』⁽⁸⁶⁾という。彼らのコタンが「不定」「安定」の何れであったのか、微妙な問題が含まれていて、簡単に結着のつくことではないが、「本図」の作製された当時は、日本人のアイヌ人に対する苛酷な支配干渉はその極に達していた。松浦武四郎の日誌類にも、アイヌ人のその悲惨な様子が随所に見られるのであるが、彼らが漁撈その他の労働者として集められると、春から秋にかけての間、山野に獲物を求めて行動する自由はなく、秋の鮭漁が終ると、ようやく『漁業相済候上蝦夷人之儀ハ銘々住所江早々遣置、十月ヨリ十一月、十二月正月二月迄之間、勝手次第鹿猟為仕候』⁽⁸⁷⁾となるのであった。この文には「銘々住所江」とあって、高倉の説くように当時のコタンの安定を思わせるものがある。

しかしいつの時代であるか、またどの程度の期間を経過してからかということは別にして、コタンの移動を示すとみられる地名はある。「本図」と「北海道庁測量・五万分の一地形図」には、より多くみられるのであるが、吾々の目に触れ易いという意味で、「国土地

理院・五万分の一地形図」に残されている地名を拾ってみると次のようなものがある。

走古丹	(別海村 アシリコタン 新村) ⁽⁸⁸⁾
床丹	(佐呂間町 トコタン 廃村) ⁽⁸⁹⁾
積丹	(積丹町 サクコタン 夏部落) ⁽⁹¹⁾

この他に今は改名されてしまった稚内市の富磯は、元は利矢古丹(リヤコタン)とよばれていたところで、アイヌ語地名である。更科源蔵によれば、越冬する部落⁽⁹²⁾ということである。

これらの地名は、過去におけるコタンの移動を示すものと考えられるのであるが、「本図」には、サクコタンに対するにマタコタン(冬村)⁽⁹³⁾があり、アシリコタンに対するにフシココタン(旧村)⁽⁹⁴⁾があるといったふうに、対照的なものもみられる。

地名の他に移動の事実を示すものとして、先にあげた白老の場合は、コタン間の争斗に敗れ、一族は日高より白老へ移住したが、白老に先住の一族は、日高よりの新来の一族から宝物を得て何処へか立退いたという。松浦武四郎の「蝦夷日誌」にも移動の例は幾つか述べられていて、たとえば『アシリコタン(東岸、平地)、新村との義(人家二軒、テルカアイソ家内二人、カンヒニセ家内七人)タイキより近頃移りしが故に号く』⁽⁹⁵⁾とある。

コタンの移動の事実、地名にも文献にもその例を探しだすことは、容易にできるが、「不定」とみられる程に短期のものであつ

のか、「安定」とみられる程に、そこに長期にわたって生活していたのかは、不定、安定という言葉に対する人夫々の考えもあり、また具体的資料に之しいということもあって、その判断は仲々に難しいところである。しかしコタンが彼らの生活の本拠であり、活動の中心であったことは疑いのない事実である。

さて彼らのコタンは、どのようなところに位置していたのであろうか。「本図」の作製された頃には、「蝦夷島記」によれば「居所は海のはた川筋に村を建て一むれづ、罷在候⁽³⁷⁾」ということである。

アイヌ人が元来北海道のどのようなところに居住していたのかは興味のある問題であるが、一六二一年の「蝦夷報告書」には「山の近くに住み且つ海に於て漁獵に従事する⁽³⁸⁾」とあり、また「蝦夷草紙」には「蝦夷地中めぐりの浜辺は蝦夷居住せり。地中に至りては蝦夷人居住せず。よつて開闢已來人跡なし⁽³⁹⁾」とある。知里真志保は「その昔一年の半分以上を海岸に住んで、主要な生活資料を漁撈に仰いでいた時代の面影が、ありありと浮んでくる⁽⁴⁰⁾」という。しかし松浦武四郎は「昔しは土人必ず海辺に不住、皆川筋に住したる物也⁽⁴¹⁾」とあり、同じ時期の「東蝦夷夜話」には「蝦夷土人は海濱に住するものは少くして山中に住むもの多し⁽⁴²⁾」と、また「漁事はじまれば、皆会所許、或は漁場に集り来る。——中略——さて漁事をはれば——中略——年中の働代をうけとりて、山へ帰り、山猟をもつて活業をなすなり⁽⁴³⁾」とある。引用した各書は、アイヌ人の居住する場所についての観察に夫々相違がみられ、海岸と川筋の何れに居住するのが彼らの本来の姿であるのかは、やはり議論のわかれるところであらう。

しかし当時は、日本人の強い干渉があつたにしても、「蝦夷島記」のいうように、海岸にコタンがあり、また川筋にもコタンが存在していたことは、多少の別はあるにしても、図1(2)、(3)でわかるように事実なのである。

(二) 交通路

北海道の道路は、寛政十年（一七九八）、近藤重蔵が十勝国の南海岸のルベシベツ（広尾町）からピタタヌンケ（広尾町とえりも町の境界）に至る山道、三里弱を開鑿したのがその初めであるといわれている⁽⁴⁴⁾。その後次第に幕府の手によって道路が整備されていったのであるが、近藤重蔵の開鑿以前の北海道の交通はどのようなものであつたろうか。新撰北海道史によれば「蝦夷地は全く未開で、開鑿した道路も、架設した橋梁も、宿舍も、馬匹も無く、僅に蝦夷を雇つて供とし、案内とし、夷家に宿り、夷舟に棹して行く外は無かつたために、和人の往来は頗る困難であつた。殊に海岸から離れた所では、漁獵のために蝦夷が露宿を重ねて稀に歩くに過ぎず、而も夏草の茂る時は、蝦夷すら困難とする途が多かつたから、和人の旅行等は到底望まれなかつた⁽⁴⁵⁾」という。少し当時のものをみてみると「蝦夷の国には日本の国の様な踏みならされたよい道路はなく、旅行するには、山を越え、海岸に沿うて進む⁽⁴⁶⁾」のであつた。踏みならされたよい道路はなかつたにしても、彼らの通いなれたものはあつたであらう。それは「得手勝手に通りて自然と出来る道路也。蝦夷

夷人の風俗にて皆跣歩すれば、其の路の広さわづかに六寸余りなり』であつた。彼らは海岸を、そして内陸は河川を往来することが多かった。具体的には、たとえばアイヌ人を案内人として調査を行った松浦武四郎は、日高国の貫気別川を溯るときの模様を『チセニカルシ(右川)、ニタツイ此辺水流急にして上り難き故舟を下し、余は上陸してヌカ平川の川筋に出たり(陸地凡一里)』と述べている。このように当時は海岸を、内陸は川筋を、足と舟とで旅をしたわけである。こうした彼らの交通路は、一見得手勝手に通つて自然に出来る道路ではあつても、地形その他の条件からいっても、当然のことであるが、場所によつては、ほぼ固定していたと思われる。

アイヌ語では、道路を意味する言葉は『ル(ー)』というが、この『ル(ー)』のついた地名が道内各所にみられるのである。コタンのところで述べたと同じ趣旨から、『国土地理院・五万分の一地形図』に残されているものを拾つてみると次のごとくである。

留辺蘂(留辺蘂町 ルベシベ 山を越えて向う側の土地へ降りて行く路のある川)⁽⁴⁰⁾

瑠辺蘂(川) (美瑛町 ルベシベ)

又留内(稚内市 マタルナイ 冬の路の沢)

マタルクシュケネブチ川(和寒町 冬の路の通つてゐるケネブチ川)

咲来(音威子府村 サクル 夏の路)

サクルシュケネブチ川(和寒町 正しくはサクルク。シュケネブチ

川 夏の路の通つてゐるケネブチ川)

ルオマンソラプチ川(南富良野町 路が山の方へ行くソラプチ川)

『本図』には、上記以外にも数多い『ル(ー)』のついた地名がある。たとえば、ルベシベにはマタルベシベ、サクルヘシベ、其の他に行先指定のヌフシャルベシベ、テセウルヘシベ、ウリウルヘシベ等がある。またチプル(船の路)、ルウエン(路の悪い)などというものもある。

『ル(ー)』はつかないが、チクシナイ(我ら通る沢)⁽⁴¹⁾、チピカルシ(チペカルウシ 海から山の川へ、或いは一つの川から他の川へ、舟をかついで越す所。船越)というものもある。

このように交通路を意味する地名が存在するのは、いま述べたように、彼らの交通路が固定して、そして相当期間を経なければ起り得ないことでもある。またこの地名の殆んど総べてが川の名であるということから、彼らの内陸での交通は、川筋を主として利用して行なわれたということ、また一水系内にとどまるこぢんまりとしたものだけでなく、時には山脈を越えるかなり大きな旅も経験しているということ等が、よくわかつて来るのである。

(三) 人 口

柳田国男は『人と土地との交渉が即ち地名である以上は、其数量は必ずしも面積と比例せず、そこに生死した人の数に伴ふのが当然

ではある』⁽⁵¹⁾といっている。一般には、其の土地の歴史が古ければ古い程、そして人口が多ければ多い程、地名数も多いと考えられている。勿論他の要素も関係して、たとえば『地名砂浜ノ処ニハ自然ト宇少キガ故』⁽⁵²⁾と松浦武四郎がいつているように、単調な目ぼしさのないところには地名が少ないのである。しかし過去よりの累積した人口が、地名数に大きな影響を与えているのは事実である。この点から「本図」における国別の地名数と人口との関係について述べてみることにする。

北海道の曾てのアイヌ人口についての資料は、今日的な正確さを望むことはできないが、『北海道志』⁽⁵³⁾から『蝦夷雑書』、『安政元年巡見記』の記録をまとめてみると、表―(3)のごとくである。表―(3)には、国別の地名数も併記した。地名数算出のための国界は、「本図」によっている。地名数の小数以下の数字がみられるのは、山岳名がたとえば二国の境界に位置しているときは、これを二等分して、夫の国へ〇・五づつ配分したからである。

「本図」は安政六年（一八五九）に作製されたものであるので、最初は作製年に近い「安政元年巡見記」のみを使用することを考えたが、アイヌ人にとって、特にこの時代はまことに厳しい受難の時代で、人口面で著しい衰退をみせたときでもあり、『蝦夷雑書』の文政五年（一八二二）の記録も併記することにした。

表―(3)にみられるごとく、僅か三十余年の間に、総人口は二〇、四八二人から一四、三三〇人へと、実に三十%もの人口減少がみられるのである。国別にみると、人口増加をみせているのは、日高国

の一〇一〇人で、四%弱と、十勝国の一七三人、七%弱のみである。他の七ヶ国はすべて減少していて、その最も著しいのは、北見国の二、一八二人の減少で、実に六六%減少である。石狩国と天塩国は共に、五十%減、後志国が四十%減といった凄じきで、当時のアイヌ人口の減少は、全く目を覆わしめるものがあつたのである。

表―(4)は、表―(3)から作製したもので、人口と地名の夫々の密度を、百平方キロメートル単位で現わしたものである。

表―(4)の人口密度の順位は、文政五年の場合是一位が日高国で、以下後志国、胆振国、釧路国、根室国、北見国、天塩国、石狩国、十勝国という順になっている。また安政元年の場合は、一位がやはり日高国であるが、以下は胆振国、後志国、釧路国、根室国、十勝国、天塩国、北見国、石狩国という順になっている。文政五年の場合とは、順位が入れかわっている国が多い。

地名密度は日高国が一位で、以下後志国、根室国、胆振国、北見国、天塩国、釧路国、十勝国、石狩国という順位になっている。

（渡島国を除いた順位である）

これら九ヶ国の人口密度と地名密度との間に、一見して密接な関係がありそうである。それが適当かどうかは別として、一応の目安として両者の相関を調べるために、簡単な計算をすると、ケンドールの係数は、文政五年の人口密度順位と地名密度順位の間では、〇・七五〇であり、安政元年の場合は、〇・五五六である。文政五年の場合は一%の水準で有意ということであり、安政元年の場合は五%の水準で有意であるということである。

文政五年と安政元年の人口記録の間には大きな変化がみられ、しかもこの変化は、日本人による全く人為的といつてよい圧力によって生じたものと考えられるが、ケンドールの係数の一%水準、五%水準といった異なった水準での有意性は、多分にこの人為的なものが原因しているのだと考えられるが、しかし、何れの場合も、人口密度と地名密度との間には密接な関係があることが明らかで、従つて、人口の多いところは地名が多い、という一般的ないい方が許されるわけである。

五 (一) 渡島国

渡島国は本州に最も近く、松前藩の本拠地でもあり、北海道では最も早くから日本人の進出したところである。松前藩は北海道統治の方針として、アイヌ人との種々の紛争を少なくするために、北海道を「和人地」と「蝦夷地」とに分けた。「和人地」は従来から居住していたアイヌ人以外は、新たにアイヌ人の来住することを許さなかつたところである。一方「蝦夷地」は全く日本人の往住を許さなかつたところである。この方針は後々まで維持されたわけではないが、当初はこの方針は固く維持されていた。

「和人地」は、当初は西は熊石から、東は亀田附近までをさしていたが、後には(寛政十二年・一八〇〇)東漸して、山越内までその境界が移動している。つまり渡島国すべてが、後には「和人地」

として扱われたのである。従つて渡島国のアイヌ人口は微々たるもので、当初の「和人地」は、『唯僅に東部知内山中及び西部見市に数名の蝦夷が居住するに過ぎず、天明八年(一七七八)の調査によれば三箇村、三軒、十二人を数へるのみ』であつたという。

亀田以東山越内までの、後に「和人地」に加えられたところは、嘉永七年(一八五四)では総人口のおおよそ九%、三七七人がアイヌ人口であつたという。そして「本図」が作製されたころは、既に「蝦夷人の半はシシャモ⁵⁷⁾の風俗に化したるを見うけたり⁵⁸⁾」という状況でもあつた。

渡島国は、このようにアイヌ人口が少なく、日本人の歴史が古く、その影響の最も強いところであつた。地名にも日本人命名のものは、渡島国の地名のうち、おおよそ三十%近くがそれである。たとえば二又・山越沢・コカ子沢・立石といったものがみられ、地名の内容そのものでは、ほとんどすべてがアイヌ語地名である他国とは、大きく変化して来ていた。しかし地名分布の面からいえば、他国との異和感は、少しも目立たないところである。函館市以西の海岸の地名の集中をみると、後志国の海岸、天塩国の海岸南半とくらべてみて少しも変つていない。また函館市から北上して亀田半島の基部を通り、内浦湾の森町へぬける交通路、木古内町から松前半島を横断して江差町へぬける交通路、江差町から渡島半島を横断して八雲町落部へぬける交通路等、川筋に沿つて明らかに地名の集中がみられる。これも他の国の交通路にみられる地名の集中と、少しも変つていない。

海岸での地名の集中といい、内陸交通路の地名の集中といい、渡島国の地名の分布の型は、他国にくらべて少しも特徴的なことはない。

「本図」が作製された頃は、先に述べたように、渡島国のアイヌ人口は微々たるもので、その生活も半ば日本人化していたということ、渡島国では日本人の社会が形成されていたわけである。地名も日本語の地名が三十%近く出現していて、総べての面において、日本人社会の強い影響下にあったが、地名分布の点では、他国と少しも変らなかったのは何故であろうか。第一には、七十%を占めるアイヌ語地名である。次に地形的制約である。内陸に平地が少ないという制約が、曾て存在していた筈のアイヌ人のコタン分布と、新来の日本人の村落の分布との間に、大きな変化が現れる可能性は少なかった。しかも、当時の渡島国の日本人は八六、〇〇〇余人とい⁶³い、その中には『耕作を業とし』⁶⁴た者もいたが、大多数は漁業関係者で、日本人の居住は、この意味でも、海岸に限られることになり、当時の他国のアイヌ人の居住するところと同じであった。これが渡島国一国で全アイヌ人口の数倍の日本人が居住していても、そして十ヶ国中、第三位という高い地名密度をもっている、地名分布の型に大きい影響を与えなかった理由であろう。そして八六、〇〇〇余人の日本人の役割は、従来の地名分布の型を変化させずに、適当な言葉ではないが、むしろ強調させることにあったようである。

渡島国の地名分布は、繰り返しになるが、七十%のアイヌ語地名と、日本人の生業は漁業が中心で、居住・活動が海岸に集中したこ

とが、いわゆるアイヌ社会型ともいふべき地名分布の型を維持させたものであろう。

(二) 胆振国東部と日高国西部

胆振国の勇払より日高国の静内までの間は、北海道のどの地域とも異なった地名分布をみせている。図—(1)にみられるごとく、この間は海岸のみならず、内陸深くまでⅢ級の高い地名の集中がみられ、このような例は他の国のどこにも見当たらないものである。

表—(4)によれば、日高国は地名密度が二五・三で第一位にあるが、その面積の六十%がⅡ級以上で占められているところでもある。胆振国は地名密度が十四・四で、第四位である。しかし勇払以東の地域は、Ⅲ級以上の地名分布をみせる地域で、日高国の西部と一体になつて、他の地域には全くみられない特有の高密度の地名分布をみせている。

このように幅広く、奥深く地名の集中がみられるのには、それだけの理由があるのであろうが、まず当時のこの地方の様子を見てみよう。

日高国沙流場所『沙流川筋——中略——鮭の溯上すること少し』⁶⁵であつて、『戸口多く産物乏しきを以て生計容易ならず故に又夏は三石、浦河両場所に出稼ぎして昆布を採り秋は勇払場所千歳に赴き鮭を漁す』⁶⁶といった状況であつた。新冠場所も沙流場所と同じく、

『産物少きを以て生計宜しからず故に又夏は静内秋は勇払場所に出稼せり』⁽⁶³⁾といったところであった。静内場所は、染退川に『鮭夥しく溯上す』⁽⁶⁴⁾るところで、『生計容易なり』⁽⁶⁵⁾といったところで、沙流、新冠場所が共に恵まれなかったのに反して、静内場所は産物に恵まれたところであった。

胆振国の勇払場所は、松浦武四郎によれば『東部第一の漁場』⁽⁶⁶⁾で『夏日の漁時諸方より出稼多』⁽⁶⁷⁾いところであった。

このようにしてみると、夏から秋にかけて産物に恵まれなかったところと、恵まれたところがあつて、一様ではなかったのである。しかし特にこの地方で共通していることは、冬季の積雪の少ないこととで、鹿の越冬には格好の地であり鹿の棲息が多かったことである。松浦武四郎によれば、沙流場所の記述に『遙向に三丁許の間一面赤く見ゆる故に、彼は何と問ふ間に土人弓箭を握り走り追行、其音に今一面赤く草の枯れたるかと思はる』⁽⁶⁸⁾とある。勇払場所も産物として『鹿皮多し』⁽⁶⁹⁾とある。明治十一年から十二年にかけての冬のことであるが、勇払郡鷗川で『鹿は最も良い避難場所の谷や沢へ幾千頭も集つて来た。そこでは雪が深いために、雪靴をはいたアイヌ人達はやす／＼と鹿を襲い、犬と棍棒とで何万も打ち殺すことができた。たて十五マイルによこ五マイルくらいの鷗川地区だけでも七万五千もの骸骨が、春に政府から鹿の損害を確めるために派遣された人々によって数えられている』⁽⁷⁰⁾ということである。これらによってこの地方の鹿の棲息の多かったことが知られるのである。鹿はアイ

ヌ人にとって、皮も肉も共に重要なものであった。『東遊記』に『食は専ら鹿肉を食ふ』⁽⁷¹⁾とあり、更に『近頃雪深き年有て、鹿の喰ふものなし。蝦夷人三四百人餓死のもの有と聞く』⁽⁷²⁾とあつて、アイヌ人にとつて、鹿肉は鮭鱒と共に主食であり、鹿肉の不足が、彼らの餓死を誘発させている程である。

表―(4)によれば、日高国の人口密度は、文政五年(一八二二)は六一・二で一位、安政元年(一八五四)では六三・四で、やはり一位である。胆振国は、文政五年(一八二二)は五二・五で三位、安政元年(一八五四)では五〇・七で二位である。両国は、共に人口密度の高いところであつたことがわかる。

表―(5)は、日高国における現在の郡に相当するものの人口である。これを見ると佐留(沙流)領だけで、日高国の四十%前後が、これに新冠、静内の二領を加えると、日高国のおおよそ七十%の人口が集中していることがわかる。

表―(6)は胆振国の場合である。勇払領は『蝦夷地にて夷人の多きは此のユウベツを第一とするよし』⁽⁷³⁾との評のとおり、勇払領は、日高国の佐留領よりも多く、胆振国の三十%を少し超える人口が集中している。このように日高・胆振国の人口が、勇払・佐留・新冠・静内の各領に集中しているが、生計容易ならぬところにも、多くの人口を集めたのには、当時のそれなりの理由はあつた筈である。しかし、その理由の一つとして、アイヌ人の食生活における鹿肉の地位を考えて、冬季における鹿の豊かさをあげてよいのではないかと考えている。

さてこれらの地方の地名密度の高さ、或いは偏りは、四―(三)で述べたごとく、また表―(4)と(5)からわかるように、この地方での人口分布、すなわちコタンの分布のあり方に大きく関係していることは明らかである。

この地方の人口分布を知るために、コタンの分布を調べてみると、図―(2)のようになる。図―(2)は「竹四郎廻浦日記」によるものである。コタンの分布については、松浦武四郎自身の「竹四郎廻浦日記」、「蝦夷日誌」、「本図」その他によって知ることができるが、夫々が少しずつ異なっていて、どれを使用するのが最良なのかを判断することは難しいのである。しかし「竹四郎廻浦日記」がコタンの規模、

即ちコタンを形成している軒数、人口、人名等が詳細に記入されているので、これによることにした。なおこの地方と比較するために、常呂、網走を中心とするオホーツク海沿岸についても作図したが、それが図―(3)である。図―(2)及び(3)は、何れも「本図」を台図としているが、図の大きさの都合でコタン名を省いてある。図中で、たとえば●9(37)とあるのは、●はコタン所在の位置を、9は軒数を、(37)は三七人ということである。即ち●のところは、九軒、三七人の規模のコタンであるということである。

図―(2)をみると、ユウブツ、アヅマ、ムカワ、サル、モンヘツ、ニイカッブ、シビチャリ等の各川では、コタンが川筋に沿って奥深く溯って分布している。そしてコタンの位置するところはⅡ級或いはそれ以上で、多くはⅢ級、時にはⅣ級の地名分布をみせている。ハイ・ガバリの両川の、コタンのないところでも、Ⅳ級の地名分布

をみせるところもある。しかし、ハイは新撰北海道史に『染退蝦夷と波恵蝦夷との争斗』⁽⁴⁾として述べられている、アイヌ人同志の争斗の戦場であつたところで、この争斗の一方の雄オニビシの砦のあつたことが知られている。詳細は不明であるが、このハイ川筋には、曾てはコタンが存在していたところである。

図―(3)では、ユーベツ、トコロの両川では、川筋に沿った内陸深いとところにコタンが存在するが、一般には、コタンの存在するところは海岸である。地名分布のⅢ級のところは、アハシリを中心としたトコロからトウフツまでの海岸である。ユーベツ、トコロの両川の奥には、Ⅲ級のところもあるが、何れもコタンの存在するところである。

このように図―(2)、(3)をみて判ることは、「本図」においては、人口すなわちコタンの分布が地名の多寡に大きく影響を与えているのではないかということである。単に人口が多くとも、コタンが海岸に限られる場合には、地名も海岸に多く、内陸深くは及んでいない。そして、コタンの分布が川筋に沿って、内陸深く及んでいけば、一般に川筋は周囲よりも地名が多いのであるが、それが一層極立ってくるのである。

胆振国のユーブツ川筋は、太平洋岸と日本海岸をつなぐ重要な交通路でもあつたが、コタンの分布もみられるところである。しかし図―(1)をみる限りでは、コタンの分布と交通路といった、地名分布に大きく影響を与える因子が二つ重なりあっているのにも拘わらず地名の分布密度は、二重の影響を受けているようには見えない。他

地方のコタン存在の影響のみのところと変っている様子はない。このことは、多分コタンの地名分布に及ぼす影響力が最も大きく、他の因子の持つ影響力は、コタンが存在するときは、その影響力のものと影をひそめてしまうのであろう。

結論めくが、日高国と胆振国のこの地方の地名の極立って高い分布密度は、人口の分布、即ちコタンの分布が、他地方とは異なっており、内陸深くまで、多かつたということに理由があつたようである。

(三) その他の国

度重なる繰返しになるが、図―(1)で明らかなことは、内陸部に比べて、海岸部が一様に地名が多くなっていることである。先に引用したところであるが、松浦武四郎は『昔しは土人必ず海辺に住、皆川筋に住したる物也』⁽⁷⁾といい、高倉新一郎も『従来アイヌは特殊の地方（内浦湾、厚岸湾など）を除き、海岸に居住するものは少なく、多くは季節の出稼ぎに止まり本村は川辺にあつた』⁽⁸⁾といっている。そうであるとすれば、内陸部の地名は、コタン、人口の關係からいってもっと多くてもよい筈であるが、図―(1)でみられる如く、そうなっていない。「本図」の作製された頃は、場所請負制度の確立、漁具の改良による沿岸漁業の発達等で、アイヌ人は漁撈労働者として、またその他の下級労働者として『海岸または運上屋元へ移住させ』⁽⁹⁾られ、海岸での定着を余儀なくされたという。とすれば、

内陸の人口は、海岸へ移動したということになる。図―(3)でみるように、オホーツク海沿岸では、内陸のコタンは極めて少ない。元々この地方には、内陸にもコタンが存在したのか、それが日本人の干渉によって海岸へ移動したのか、或いは元々この地方には、内陸にコタンが少なかったものなのか、ということは不明であるが、「本図」作製当時は、現実的に内陸にはコタンが少なく、海岸にコタンが集中していた。「竹四郎廻浦日記」によれば、日高国と胆振国を除くと、川筋にコタンの分布しているのは、石狩川、図―(3)にみられるユーベツ川、トコロ川、そしてクスリ（釧路）川、トカチ川等だけである。その他はすべて海岸にコタンが分布している。しかし、たとえば天塩川は「竹四郎廻浦日記」では、川筋のコタンの分布がわからないが、同じ松浦武四郎の「天塩日誌」⁽¹⁰⁾には三・軒・一五二人のアイヌ人が十八のコタンを作っていたことになっている。「竹四郎廻浦日記」と「天塩日誌」の内容の相違は何が理由なのかわからないが、兎も角天塩川筋にはコタンが存在していたことは事実である。そしてこのような相違の例は他にもあることであろうが、いわゆる大勢としては「竹四郎廻浦日記」の記述の通りで、コタンの分布は内陸に少なく、海岸に多く集中していたといつてよい。このような当時の状況から、地名が内陸に少なく、海岸に多いということは、先に述べた人口或いはコタンの關係からいって、一応納得のできることである。しかし、内陸におけるコタンの分布が少なく、従ってアイヌ人の少ない当時としては、曾ては内陸にも多くみられた地名が、人口の移動によって、次第に忘れられていったものなのか、或いはま

た初めから少なかったものなのか、コタンの分布における問題と同様に、今では知ることができなくなっている。

さて内陸の地名分布の特徴は川筋にあるので、これについて述べることとする。

内陸における地名分布は、川筋に沿って盛り上りがみられるが、それはアイヌ人が海岸に定着居住を余儀なくされてコタンを形成しても、彼らにとって川そのものは必要欠くべからざるものであったからであろう。知里真志保が『後代のアイヌの社会では、いちじるしく狩猟に重点がおかれ、山狩と熊祭が最大の関心事であったかのような印象をうけるのでありますが、古くさかのぼれば漁撈が彼らの生活の中心であり』⁽⁷⁹⁾といい、また『この魚（筆者註・鮭）を主食と考えた時代のあったこと——中略——最初の漁はたぶん川に起ったのであります』⁽⁸⁰⁾というように、彼らの生活は、いわゆる主食採取のために川を必要不可欠のものとしていたのである。

図—(1)において、川筋に沿って地名が多く集まっていることがわかり易いのは、ある程度以上の長さの流路をもっている川である。たとえば天塩川をみると、川口附近のⅠ級のところを除いて、Ⅱ級或いはⅢ級で、周囲よりも地名の多いことがはっきりわかり、地名分布のあり方だけでも、おおよその川筋を知ることが出来る程である。「本図」が作製された頃は、先に述べたようにこの天塩川には幾つかのコタンが点在していた。川筋に居住するアイヌ人は、川から食料を得るために天塩川は不可欠のものであったろうが、また一方では彼らの交通路としても不可欠のものであった。

天塩川そのものを、上流・下流の交通路としたことは「天塩日誌」にカモイルウサンを通過するときの様子が述べられていて、それを見てみると、『其半腹より大岩崩落けるが、是は往昔爰へエナヲ供えず過しかば、岩面崩て下行船を碎きしと、神威著しきとて土人等惣てエナヲと烟草米を一撮づ、供て下る』⁽⁸¹⁾とある。またこの日誌の十五・六年後明治の初期の「關幽日記」にも『カモイルウサン』ノ嶮嶺アリ。土人幣ヲ奉シ酒ヲ供ス。蓋シ夷禮也』⁽⁸²⁾とある。この両書を見ると、天塩川は『往昔』より舟で上下していたこと、また此処を通過する際には、一つの儀式を必要とする迄になっていたことを知ることができる。このように一つの儀式が定着するのには、アイヌ人が長年の間この川を交通路として、川上へ川下へと往来しなければならなかったことであろう。現在では、此の地は「神路」^{カミジ}（中川町）という優雅な名に翻訳されて、その昔の面影を残している。またこの他に、この川には北見国や石狩国へ行く交通路もあって、四—(2)で述べたような交通に關係した地名もみられる。アイヌ人は川を主食その他の食料を採取するところとし、また交通路とすることで地名を増していき、次第に川筋と周囲との地名密度の差を拡げていったのであろう。

いま天塩川が交通路として利用されたことを述べたが、同様に他の川についても、曾てアイヌ人が利用し、特に後になって日本人も利用した交通路は、それが天塩川のような大河でなくとも、それと知ることのできる程度に地名分布の盛り上りがみられる。たとえば瀬棚（後志国）——国縫（胆振国）、歌棄（後志国）——長万部（胆振国）、

岩内(後志国)——余市(後志国)、石狩(石狩国)——勇払(胆振国)、網走(北見国)——釧路(釧路国)等は、後になつて道路が開鑿されたところでもあるが、アイヌ人もよく利用したところであつたらしく、川筋を溯り、山を越えて、川筋を下るといつた交通路に沿つて、途切れることなく地名分布に盛り上りがみられるのである。こうした交通路の山越えのところに、「關幽日記」でいう幣、すなわち「天塩日誌」でいう「エナヲ」に由来する稲穂峠という名が、今でも残されているところがあり、その昔そこを往来したであろうアイヌ人の姿をしのぶやうとなつてゐる。

アイヌ人は川を利用することによつて、日常生活の必要に迫られて、彼らの接触する範囲で地名を附けていったのであり、その結果が、図一(1)にみられるような川筋への地名の集中がおきていったのである。

さて最後に川筋の地名分布について、一言つけ加えておくことがある。それは石狩川、十勝川の両大河の上流において、地名の分布に、塊状の盛り上りがみられることである。石狩川においては神威古潭より上流、十勝川においては池田より上流の地点にある。簡単に結論をいえば、夫々の川の支流の合流した結果である。一見その塊状部には、地名数と人口或いはコタンの関係からいつて、多くのコタンがあり、そして多くのアイヌ人が居て、彼らの活発な活動を思わせるのである。事実、そうした面も持ち合わせているのであるが、各支流が合流するために接近して来た結果という方が、理由としては大きいのである。「北海道庁測量・五万分の一地形図」で、両河川の同地点を検討し

てみると、石狩川においては「本図」と同様の塊状の盛り上りがみられるが、十勝川においてはそれがみられない。

日本人の社会では、農耕のために平野・盆地を利用するが、「国土地理院・五万分の一地形図」にみられる石狩平野、上川盆地、十勝平野における地名分布は、夫々の平野・盆地の隅々まで地名が高密度に分布してゐて、日本人の農業を主とした社会の影響をよく反映しているのである。アイヌの社会では、あくまで漁獵が主であり、農業は可成り昔から行われていたということであるが、その規模は非常に小さく、地名分布に影響を与えるには至っていない。石狩川の神威古潭より上流の地名分布の塊状の盛り上りは、やはり盆地内を流れて来た各支流が合流する結果なのである。十勝川の池田より上流の場合は、「竹四郎廻浦日記」によれば、その附近には五コタン、五三軒、二八六人のアイヌ人が居住していたが、この意味では日高国、胆振国の場合と同じく、地名の集中は当然のこととも思われるのであるが、「北海道庁測量・五万分の一地形図」との対照の結果では、「本図」の河川記入の不正確さがもたらしたもので、各支流の近づきすぎた記入が原因である。

六 まとめ

北海道の地名の特徴は、現在でもアイヌ語地名の多いということにある。しかし日本人の進出によつて、次第に日本語地名が出現し

てくることになった。アイヌ語地名としての致命的な転機は、明治以降にやって来た。それはこれまでの海岸を主とした居住ではなく、内陸深くまで日本人が居住し、行政が全道の隅々にまで及ぶようになると、ところによっては明治の初期に、字名改正が行われるようになったことである。北海道の市町村史を開くと、字名改正についての記述がみられ、明治以降現在に至る一つの傾向となっている。アイヌ語地名は行政名としても、またそれ故に地図からも姿を消している。「本図」の作製された頃は、アイヌ社会は既に荒廃の度を進め、コタンの分布も本来の姿からみれば、相当に歪められていた訳であるが、地名については、アイヌ語地名が多く残されていて、当時のアイヌ社会の面影が強く残されているのである。

「本図」の地名分布の特徴は、全く現在の日本人社会を反映していると思われる「国土地理院・五万分の一地形図」にくらべるとよくわかるのであるが、海岸の殆んどが、不十分な面積の単位区画でありながら地名数が多く、内陸は川筋を除けば、十分な面積の単位区画であるにも拘わらず地名数が少ない。川筋の場合は、アイヌ人の食料採取の場であり、交通路でもあったために地名が多くなっている。

アイヌ人の命名法は全く実利的であり、彼らが日常生活し、必要とするところ以外には一切命名することがなかった。従って「本図」に書きこまれた数多くの彼らの地名は、彼らの活動そのものの記録である。この意味で、地名分布図(図-1)も、当時の彼らの活動の抽象化された記録といつてよいように思われる。

表-1)

沙 流 川 筋		
コタン名	軒数	人数
サ ル ブ ツ	13	64
ビ ラ カ	25	151
シュムンコツ	17	94
ニ ナ 村	16	67
ビラトリ村	28	151
ニ フ タ ニ	25	110
ニ フ エ 村	24	106
ヌ ッ ケ ベ ツ	8	48
ヲ サ ツ ナ イ	7	29
ホ ロ サ ル	18	85

表-2)

オ ホ ー ツ ク 海 沿 岸					
コタン名	軒数	人数	コタン名	軒数	人数
ヤムワッカナイ	9	50	ヲ ム	1	6
コ イ ト イ	7	41	サ ワ キ ベ ツ	1	2
マ シ ホ ヌ	1	8	サ ワ キ	5	35
リヤコタン	2	14	ヲ コ ッ ヘ	4	11
ソ ウ ヤ	39	90	ル ロ チ	1	4
ヲランナイ	1	—	ヲタノシキヲマナイ	2	9
ヌルシュツ	5	13	シ ャ ロ ロ	11	34
チエトマリ	1	—	シ ョ コ ツ	23	105
ヲニシヘツ	1	—	キナチャシナイ	1	4
サルウコツ	1	—	ウエンコタン	2	8
サルブツ	3	—	モヤシャン	3	7
トンベツ	2	12	ラン子ノトロ	34	143
シヨナイ	2	—	モンヘツ	3	19
ヘライウシ	2	—	シュフヌツナイ	1	2
トイマキ	2	—	この間は、コタン名を省略してあるが、図-(3)に軒数、人数を記入してあるので参照してください。		
ノナヲマイ	6	—			
エ サ シ	26	93			
トホシベツ	4	21	シュマトマリ	2	11
チカフトムシ	2	8	ラン子ベツ	8	38
ホ ロ ナ イ	3	—	シレトコ村	3	10

表—(5)

日高国の人口内訳		
領 名	人 口 (文政5年)	人 口 (安政元年)
佐留領	1,215	1,116
新冠領	358	376
静内領	523	644
三石領	221	216
浦河領	328	432
様似領	132	174
幌泉領	173	102
合 計	2,950	3,060

表—(3)

国 名	人 口 (文政5年)	人 口 (安政元年)	地 名 数
渡島国			958
後志国	2,759	1,569	1,094.5
石狩国	2,054	978	892.25
天塩国	1,538	769	914.75
北見国	3,297	1,115	1,538.75
胆振国	3,741	3,613	1,204.5
日高国	2,950	3,060	1,220
十勝国	1,099	1,172	658.75
釧路国	2,153	1,468	703
根室国	891	586	562.5
合 計	20,482	14,330	9,747

表—(6)

胆振国の人口内訳		
領 名	人 口 (文政5年)	人 口 (安政元年)
山越領	504	368
虻田領	800	600
有珠領	417	454
室蘭領	144	492
幌別領	231	257
白老領	332	264
勇払領	1,313	1,178
合 計	3,741	3,613

表—(4)

国 名	人口密度 (文政5年)	人口密度 (安政元年)	地名密度
渡島国	—	—	21.9
後志国	60.8	34.6	24.1
石狩国	14.4	6.8	6.2
天塩国	17.5	8.8	10.4
北見国	23.2	7.9	10.8
胆振国	52.5	50.7	14.4
日高国	61.1	63.4	25.3
十勝国	11.3	12.0	6.8
釧路国	30.4	20.7	9.9
根室国	26.0	17.0	16.4
平均密度	27.7	19.3	12.2

注

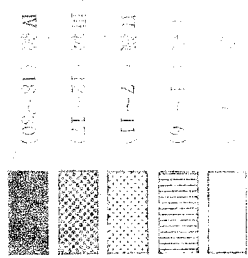
- (1) シンポジウムアイヌ 北海道大学図書刊行会 昭和四七年 一八〇頁
- (2) アイヌ民族誌(上) 第一法規 昭和四四年 七九頁
- (3) 明治以後の北海道測量史 高倉新一郎 北方文化研究報告 第十八輯 昭和三八年 一頁
- (4)・(5)・(6) 東西蝦夷山川地理取調図 凡例
- (7) ホラシ・ケブロン報文 開拓使 明治十二年 六一九頁
- (8) 石狩十勝河紀行 松本十郎 日本庶民生活史料集成 第四卷 三一書 昭和四四年 三六三頁
- (9) 北海道蝦夷語地名解 永田方正 国書刊行会 昭和四七年 例言 五頁
- (10)・(11) 同
- (12) (3) 同 二頁
- (13) アイヌ語地名の訳は、山田秀三氏による。以下同
- (14)・(15) 同 緒言 一頁
- (16) 地名の研究 柳田国男 柳田国男集 第二十卷 筑摩書房 昭和四五年 六頁
- (17) 同 三二頁
- (18) コタンは吾々の社会の部落、村に相当するものであるが、知里真志保によれば、家一軒しかなくともコタンであり、或時期だけ仮住居するだけの場所でもコタンである。一時的にせよ永住的にせよ家の在る所をコタンというのである。
- (19) 蝦夷島記 続々群書類従 第九 国書刊行会 明治三九年 五二六頁
- (20) 蝦夷草紙 最上徳内 北門叢書 第一冊 国書刊行会 昭和四七年 三二五頁
- (21) 竹四郎廻浦日記 松浦武四郎 安政四年(一八五七) 三十巻よりなるもので、当時のアイヌ人の様子が詳細に述べられている。
- (22) アイヌの足跡 満岡伸一 大正十三年 八五頁
- (23) 同 三一五―六頁
- (24) 同
- (25) アイヌの住居 鷹部屋福平 昭和十八年 三頁
- (26) アイヌ研究 高倉新一郎 北大図書刊行会 昭和四一年 一三〇頁

- (27) 同 一三一頁
- (28) 増訂松前蝦夷場所請負制度の研究 白山友正 慶文堂書店 昭和四六年 四二頁
- (29) 同 三六八頁
- (30) 同 四六一頁
- (31) 地名アイヌ語小辞典 知里真志保 檢書房 昭和三二年 一一五頁
- (32) アイヌ語地名解 更科源蔵 北書房 昭和四一年 二〇〇頁
- (33) 同 三四一頁
- (34) 同 三三〇頁
- (35) 同 八四頁
- (36) 蝦夷日誌(上) 松浦武四郎 時事通信社 昭和三七年 二七八頁
- (37) 同
- (38) デ・アンジェリスの蝦夷報告書に就て 児玉作左衛門 北方文化研究報告 第四輯 昭和二六年 二二一頁
- (39) 同 三一四頁
- (40) ユーカラの人々とその生活 知里真志保 知里真志保著作集3 平凡社 昭和四八年 三八頁
- (41) 同(下) 一七五頁
- (42)・(43) 東蝦夷夜話 大内余庵 北門叢書 第五冊 国書刊行会 三九九頁
- (44) 新撰北海道史 第二卷 四二二頁
- (45) 同 一七一頁
- (46) 同 二二八頁
- (47) 同
- (48) 同 一三八頁
- (49) アイヌ語地名の訳は、知里真志保氏による。以下同
- (50) 同
- (51) 同 二六―七頁
- (52) 同
- (53) 北海道志 歴史図社 昭和四八年
- (54) 各国別の面積は、北海道年鑑(北海道新聞社 昭和四八年)による。

- (55) (44) 同 一六〇頁
- (56) (28) 同 三二〇―一頁の第四表による。
- (57) シサムのことで、隣国人の意味である。この場合は、日本人のことをさしている。
- (58) (42) 同 三九三頁
- (59) (44) 同 六八〇頁
- (60) 三船蝦夷日誌(上) 松浦武四郎 吉川弘文館 昭和四五年 五一―一頁
- (61) (62) 日高開発史 日高支庁 昭和二九年 二二頁
- (63) (64) (61) 同 二二頁
- (65) (61) 同 二二三頁
- (66) (67) (36) 同 一一二頁
- (68) (36) 同 一六〇頁
- (69) (36) 同 一一二頁
- (70) 我が半世紀の回想 エドウィン・ダン 高倉・原田訳 北方文化研究報告 第十二輯 二七九―二八〇頁
- (71) 東遊記 平秩東作 北門叢書 第二冊 国書刊行会 三三三頁
- (72) (71) 同 三六四頁
- (73) 北海隨筆 板倉源次郎 北門叢書 第二冊 国書刊行会 五三頁
- (74) (44) 同 一三七頁
- (75) (36) 同(下) 一七五頁
- (76) (26) 同 一四二頁
- (77) (36) 同(下) 一七五頁
- (78) 天塩日誌 松浦武四郎 日本古典全集 日本古典全集刊行会 昭和十二年 二二三―二六二頁
- (79) (40) 同 三七頁
- (80) アイヌの鮭漁 知里真志保 知里真志保著作集3 平凡社 昭和四八年 七九頁
- (81) (78) 同 二二三頁
- (82) 關幽日記 佐藤正克 日本庶民生活史料集成 第四卷 三一書房 昭和四四年 三一五頁

(83) アイヌの農耕文化 林 善茂 慶友社 昭和四四年 二〇四頁

図-1)



(注) 本図は、本邦の地誌的資料に依る。

地名分布図

——「東西蝦夷山田地理原図」における地名分布

図-3)の部分

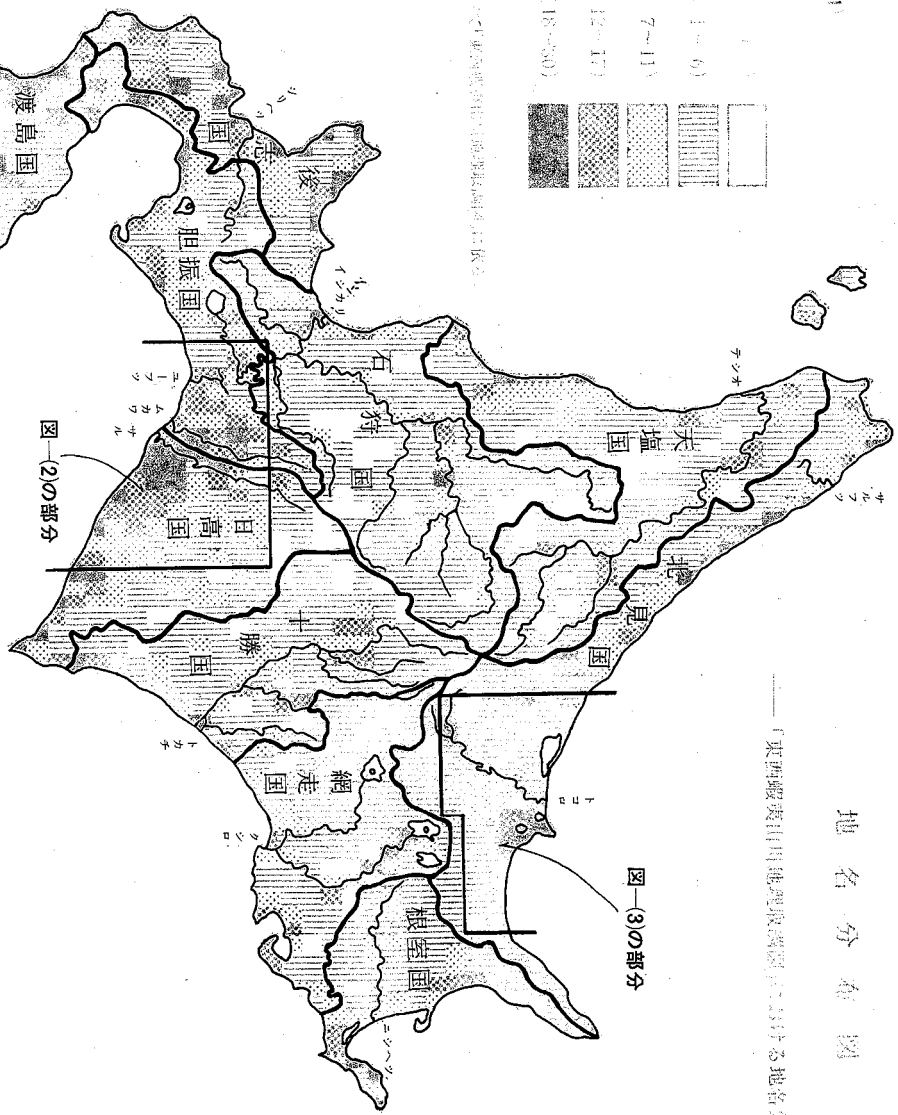


図-2)の部分

本邦の地誌的資料に依る。比例尺 200 万倍。資料は、本邦の地誌的資料に依る。

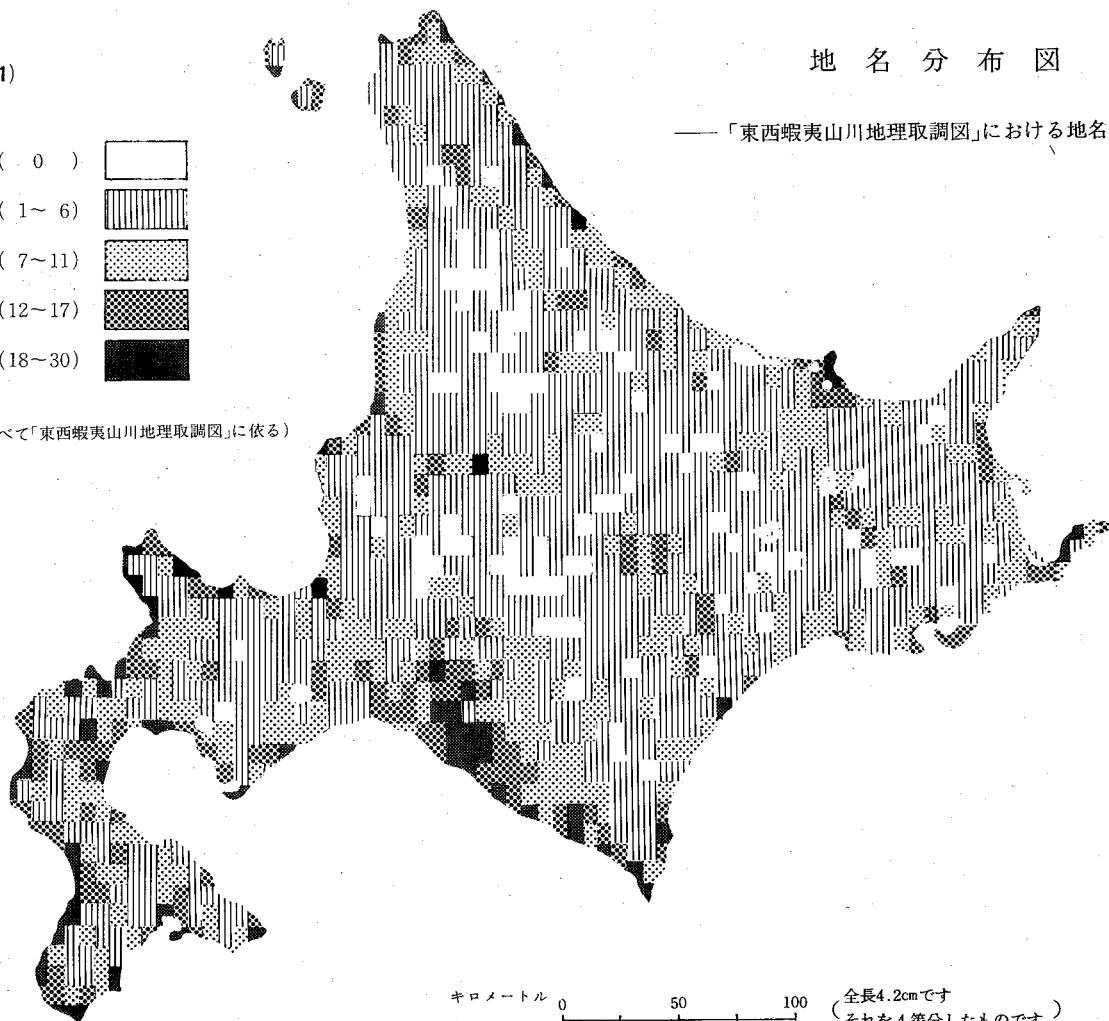
図一(1)

- 0級 (0)
- I級 (1～6)
- II級 (7～11)
- III級 (12～17)
- IV級 (18～30)

(輪郭、湖沼はすべて「東西蝦夷山川地理取調図」に依る)

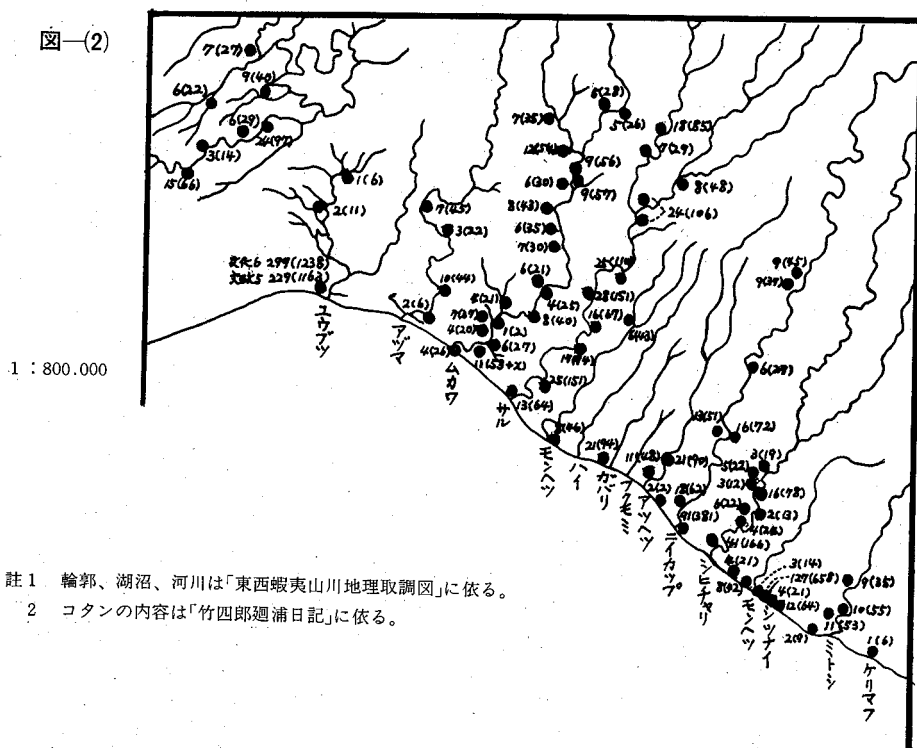
地名分布図

——「東西蝦夷山川地理取調図」における地名分布——



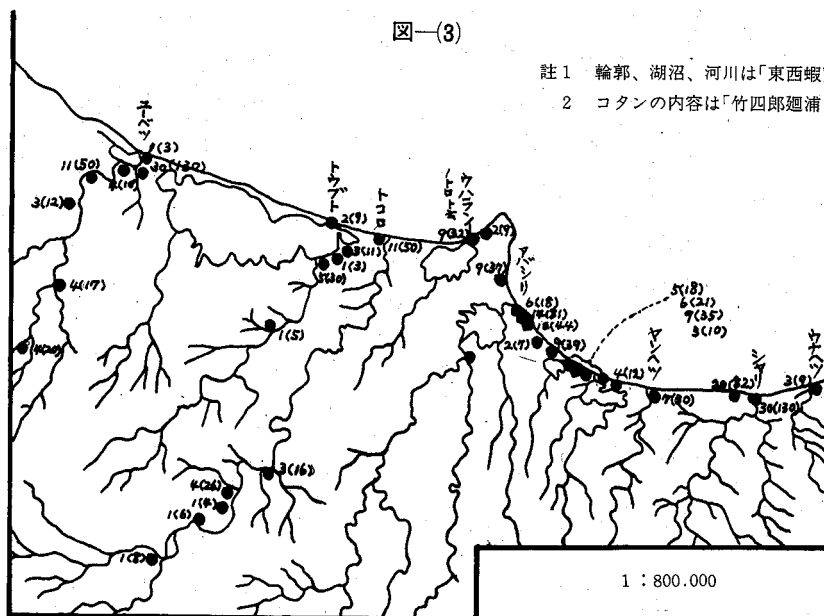
キロメートル 0 50 100 (全長4.2cmです
それを4等分したものです。)

圖—(2)



- 註1 輪郭、湖沼、河川は「東西蝦夷山川地理取調図」に依る。
2 コタンの内容は「竹四郎廻浦日記」に依る。

圖—(3)



- 註1 輪郭、湖沼、河川は「東西蝦夷山川地理取調図」に依る。
2 コタンの内容は「竹四郎廻浦日記」に依る。